

平家物語の佛教史的考察の方法

平 祐 史

我が国の史上に於いて十二世紀末に「平家物語」なる一大文芸作品が出現したと云う歴史的事実は唯單なる偶然でもつてすまじ置くことの出来ない歴史的事実である。偶然でない必然的な要求に基づいた「平家物語」の成立はそれだけに時代に對する時代の反映であり映写である。従つてその中に見られる時代の社会及び精神思想に關しは一つの文芸作品として一蹴する事が出来ないものが存する。

平語の研究が遂によく「平家物語」はいはば一種の多角的な一大領域だ」と云つてゐる様にその全篇に聚つてゐる精神、思想も多角的であると云える。従つて之に對する研究態度も亦多角的な作品として觀賞するに止まらず多角的な研究領域を持つと云い得るのである。即ち国文学的に、口文学史的に、精神思想史的に、歴史的に更に宗教的にと各異つた意味を持つ立場にあつてその研究方法態度は多種多様な研究角度と価値を持つものである。

平語を読む誰れしもが

「祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響きあり

沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理を顯わす

おごれる人も久しからず 唯春の夜の夢の如し」

と平家二十余年の栄枯盛衰を、悲しむべき惜りと云うか無常感で全篇を支える基調となつて人間の脆さ、果敢^{ハカ}なさ、果敢^{ハカ}なさを物語つてゐる事に心をうつたれるであらう。かくの如き人間の脆さ、果敢^{ハカ}なさは畢竟する所「盛者必衰の理」或は「会有定数」の悲しむべき惜りの支配から免かれ得ぬ「理」となつてゐるのであつて、「素の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の禄山」或は「永平の将門、天慶の純反、康和の義親、平治の信賴」更に「平朝臣清盛」等の人々、引いては誰れしも受くべき定めの外ならぬと云ふ無常のさびしさに対する極めて諦觀的な考えの中に六道輪廻の里から解脱厭離して救われようとする未世の安住を欲求する宗教的な精神が一貫してゐる。この様な宗教的精神を全篇に滲ざらしてゐる平語は散文詩的な論理的叙述によつて劇的な興味をもつて當時の出来事、即ち丁史的事象を取扱つてゐる。

かくして平語の主人公たる清盛は、強忍な、暴虐な、残忍な性質で、この清盛と云ふ一人の人間の下の故王故母及びその母刀自、更に仏、或は俊寛僧都、康頼が如き一連のあわれな人間の運命を見出す事が出来、如何に狂暴な人間性の記号が世に横いするか。この記号に依つて慮へられてゐる人々の間には、

「涌出するも枯るるも同じ野辺の草 何れか秋にあはではつべき」

と歌はしめ、更に亦

「仏も首は凡まなり 我等も遂には仏なり。何れも仏性具せる身を 隔つるのみこと悲しけれ」

と今様を歌はし、鬼野島の流人康頼をして

「薩摩海神の小島に我ありと、親には告げよ八重の河風」

「思ひやれしほしと思ふ旅だにも、猶あることはこひしき物を」

「せめては一本なり共都へ伝へてたべ」と祈念する「心」等々如何に優しく亦哀れな人間の心が窺われるか。更に亦、重盛、重衡、熊谷貞実、十手、横笛等が「未せ」と云う輪廻の苦しみ、の里から、如何にして脱れようとしているか等の心理的描寫をもて努めて語らうとしている。

これらの神話ば平家一門の盛衰の一つの縮図として取扱はれいすれも諸行の無常と、盛者必衰の理と云う基調から諸法実相たる仏性の照悟を如来の本願念仏に求め来世への欣求を希う宗教的な自覚の過程を如実に描けるものがあると云えよう。換言すればこの宗教的自覚の過程は「予が如き禪者の苦盡取えてせんや足政に念仏の一門に依て聊か至諭の要文を集め之を披いて之を修せば覺り易く行じ易からん」と欲か国淨土教興起に組織的な且つ個性の強い学同的な体系を与えた恵心僧都の往生要集の止觀念仏から法然の説く「ただ往生極樂の爲には斷無阿彌陀仏と申して疑いなく往生するぞと、申す外には別の仔細候はず」と云う如来の本願の念仏に至る当代の人々の宗教的な自覚過程——宗教的體驗の度と過程——と云うか、仏と凡天間に於ける宗教的な緊張の仕方の心を充分に汲み取れるのではなからうか。

この様に平詔が宗教文学特に「仏教文学」的なる而も仏教説話文学として充分に仏教的価値を有する文学である反面、当該社会の尸式的事故を編年式に取りえているものである。従つて平詔を一般的文芸作品として觀賞にのみ止まることはその価値を減少せしむる危険性がある。かかる意味に於いて「仏教文学」とは聖即ち宗教と美即ち觀賞すると云う宗教的な価値と云う所面の価値を有するものがあると同時にその文芸作品の中にあふれた思想精神の裡に其の思想

精神を生んだ当該社会人の宗教的自覚或いは体験を讀取らなければならぬ。こゝに丁史的研究の意義が存するのであると思う。

一体宗教とは最も一般的に云つて超越者と人間との關係の上に成立するものであると考へられる。即ち仏と瓜夫（衆生）の關係を意味するものであつて、種々の宗教的体験の相異はこの二者の關係（關係の仕方）の相異に依つて生ずるものと考へられる。

依てこの場合——平讀に現れたる仏教思想と宗教的自覚過程の究明の爲には——先づ当該する社会に於いて仏と衆生（瓜夫）とが如何なる關係に於いて緊張していたかを發見する事が私に与えられた立場であり出發点である。

然しながらこの立場、出發点に到達するまでにまだ幾多の問題が残されているのに氣附くのである。先ず当該社会とは何を指すものか、これに就いては先ず平讀の製作、成立、年代を考へねばならぬ。

その成立及び作者に關しては異説已々であり、徒然草には「後鳥羽院の御時信濃前司行長」の作れるものであるとして居り、又眞本に於いても百二十余を載入てが、国文学史家の云う定説に従つて、承久の乱より以前即ち後鳥羽院の建久から建保まで凡そ三十年間に成立したものであるとするとするのが至当であらう。従つて平氏一門が西侮に滅亡してより凡そ半世紀後の成立である云える。勿論平讀は編年體的發迹構成を有つが文学書であつて、丁史書として当該事象を丁史事實として肯定することは早計であり許されぬ。従つてそれだけに作者の主観と作者の時代思想的な影響は多分に被りまぬかれないものと見てよい。従つて平讀の中には史実と相異する点もあり得るのであらうから、丁史資料として直接取捨や取扱ふことは危険であると云え

よう。

西田直二郎氏（日本文化史序説）は、「テルタイカ」は生者から分離してあるべきでなく現在から時の隔りに依て、隔絶せるものではない」と引用し、「この考えは凡ての『歴史』が過去の事實を取扱つてゐることにほゞ異ならないが眞の『歴史』と云はるべきは、生命ある人間團體の事實として生き生きとしたものであるべきでなければならぬ」のであつて、「過去の心を現在の生の心と結合する限りに於て心は過去の關心事ではなく現在の關心に應ずるものとなしければならぬ」。こゝに「生命ある」「歴史事實としての時代の心が生きるわけである。従つて『歴史研究』とは『過去の人間活動のうちに自らを見出すこと』である」と述べて居られる。

元來東洋に於いては『歴史』を鏡鑑と呼び我が國に於いても大鏡、水鏡、増鏡と呼ばれる如くこれらは『歴史』である。この名の示す如く鏡鑑は物象を映出する如く『歴史』が過去の事實一般を映出し善惡功過を照写する動態の用を爲す倫理的要素を包含するものであつた。

こゝに「自覚された『歴史』」と反省の用をなす「倫理的な『歴史』」が見られるが、これらの『歴史』が更に文化を創造された当該社会の人々の心になつて創造しようとする統一ある純粹な形で表現される『歴史』が所謂文化史と呼ばれるものであると考へるものである。

かゝる立場に立つて平家物語に現われたる社会現象を当該社会（即ち平家時代）の持つ「心」の反映として見ようとするのである。平語には「ほ／＼」「未代」と云ふ語が見られる様に、「未代」は「變遷せ」であり未來到來の意識の最も強く表はれた時代に生きた人々の心、同時に貴族の「侍るもの」として支配を受けて吾に武士が自我の発見による抬頭と旧文化阿堵者に代る文化阿堵者となつて獨得な文化を創造した一見貴族文化を繼承しているが如く見做され易

いがしと云えるであらうし、像法から末法へ、貴族文化から新興武士文化へと、精神思想及び社会の転換期の蠱の中にある人々の心は平語の作者に依つて更出された人間の心とその體みとは矢張りこの時代を切り離して存在することは出来ない。

従つてこの時代とかけ離れて存在することの出来ない時代の声、乃至人間の心、若しくはそれを反映せしめた物語、或は文芸作品に依つて表現されようとした心、精神思想は單に平語が偶然でもつて創作されたものではなく、平語に流れる思想精神もやはり当該社会、時代の声として彫かねばならないものがある。尚且その中に現はれた人々の宗教的思想及びそれに対する意識を考察せんとすることは仏教史研究に課せられた一つの分野であると信ずる。

かくして、この立場「心を読み取る」ことに於て、平語に現われたる仏教思想とその自覚過程を仏教史的考察で以てほぐして行く事が私に与えられた立場であり方法の出發となるものである。